

小・中学校に招かれて講演に行くことが多々ある。それも私にしては重要な使命だと思っただけである。在日韓国・朝鮮人として、またハンセン病元患者として生きてきたわが半世紀を話す。ともに日本社会では偏見差別を受ける対象であるので、その差別解消のために、「どうあらねば」と体験に基づいて私なりに話をするのである。

子どもたちには予断がなく、純粹なので私の話す言葉がストレートに脳裏に刻まれるから言葉を選ばなければならぬ。迂闊には言えない。講演終了後の質問は実に鋭く具体的である。終わりが無いほどに質問をぶっつけてきた学校もあった。小学生はそんな余念が無く、思ったことをそのまま質問で表出するからであろう。

岡山県の北部にある全校生徒六十名ほどの小さな小学校に行ったときの印象深い思い出がある。講演終了後、私は校長先生の部屋で話をしていたら、生徒の何人かが部屋のドアを半ば開けて、入ろうか、どうしようか迷っているふうであった。私は勝手に「お入りよ」といったら、待つてましたといわんばかりに、五、六人が部屋にはいり、私の周囲に群がったのである。

そして、私の屈曲した手を握りまわしながら「金さんどうして手がこんなに曲がった？」と、さも珍しいものを見つけたように質問をするのであった。

私は一瞬戸惑いもしたが、私の手こそが実物の教材であると思い、「後遺症」について説明をしたのであった。子どもたちの好奇心にさらされながらも、感動に包まれた瞬間でもあった。そう、これが私の固有の人生なのである。

自分史を書くという思いから、書き始めにおいてはペンの運びもスラスラ走ったが、段々ペンは鈍くなってきた。これでは、とても他人に読んでもらえるものではない、と思い始めたからである。思い直した。人に読んでもらうために書くのではない、自分にとって忘れ難い体験を書き残せば、それでいいのだと。